

トールキンの道徳的人生観の土台を成すニューマンの教え
*Newman's Teaching Which Gives Base to Tolkien's
Moralistic View of Life*

島 居 佳 江

「福岡女学院大学短期大学部英語英文学紀要」第六十号抜刷

2024（令和6）年3月

トールキンの道徳的人生観の土台を成すニューマンの教え Newman's Teaching Which Gives Base to Tolkien's Moralistic View of Life

島 居 佳 江

1. はじめに

J. R. R. Tolkien が終生持ち続けた道徳的人生観は、トールキン幼少期に後援者であったオラトリオ会、そしてその創設者、John Henry Newman の影響を強く受けていることを *J. R. R. Tolkien Beowulf* そして *The Lord of the Rings* の分析を通して考察する。ニューマンは、オックスフォード運動を経てアングリカンからカトリックに改宗し、ローマで叙階を受け、オラトリア会を導入すべくイギリスに帰国した。ニューマンは、経歴が異色だけでなく、考え方にもカトリック一筋の司祭とは異なる柔軟性がある。ニューマンは「道徳的成長が聖書の正しい理解の条件である」(Chadwick 54) と考えており、トールキンにもその考え方が継承されている。トールキン研究において、彼の幼少時代の環境や信仰との関わりにより、ニューマンが言及されることは少なくない (Birzer 86, Duriez 667, Harpper 144, Lobdell 614, Pearce 19)。しかしながら、ニューマンの思想や信念の影響をトールキン作品に読む批評は十分とは言い難い。

Beowulf 『ベオウルフ』の作者はキリストを信仰する詩人であるが、名前などの詳細は明らかにされていない。彼は、キリスト誕生前の時代における、神を知らない偉大な戦士の物語を書いた。トールキンは一貫してキリスト教以前の邪教を信じる人々に対する寛容な態度を見せている。ベオウルフとトールキンの描く『指輪物語』のキャラクターたちも異教世界において常に最善を尽くす冒険者と言える。本論では、ニューマンの影響を受けたトールキンのカトリシズムに留まらない道徳的信条を考察する。

2. 中道 (via media)

トールキンは『ベオウルフ』の詩人が中道 (via media) を通して書いたと説く。Tom Shippey は、トールキンが『ベオウルフ』の詩人のように、キリストとインゲルドの間、聖書と異教神話の中間の道を歩んでいると述べている (227)。

トールキンがこの中道 (via media) を用いた背景は、Alcuin に反駁するためであった。アルクインはノーサンブリアの有名な神学者であり、博識者である。彼はかつてリンディスファーンの司教スペラトゥスに手紙を書き、その中で次のように述べている。「修道士が集う司祭館では神の言葉が読まれるべきだ。そこでは、ハーブ奏者ではなく異教徒の歌でもなく教父の講話を聞くにふさわしい。インゲルドはキリストと何の関わりがあるのか。」これに対して、トールキンは以下のように彼の考えを述べる。

Alcuin is rebuking monks for listening to native English lays sung to the harp, and for still taking an interest in pagan kings who are now lamenting their sins in hell. This rebuke is, of course, evidence of the existence at once of a stern and uncompromising reforming spirit, and of laxity (probably culpable laxity for monks). ... There is also a *via media* which, no less Christian than Alcuin, yet does not consign all the past to oblivion (or to hell), but ponders it with increased insight and profundity'. (*J. R. R. Tolkien Beowulf* 328)

William Smith は、より詳細な背景を以下のように語り、トールキンのこの時代に対する共感と思いを表明する。

Although Ingeld is mentioned only briefly in *Beowulf*, scholars, including Tolkien, have often applied Alcuin's question to the study of the poem, in an attempt to reconcile the pagan and Christian elements

evident in it. In “Beowulf: The Monsters and the Critics,” Tolkien suggests that the poem is inspired, at least in part, by questions like the one asked by Alcuin and argues that Beowulf resolves this debate by presenting the tragedy of pagan life not in a condemnatory way but in an attempt to stir Christian sympathy. The Beowulf-poet is able to blend successfully pagan and Christian elements, according to Tolkien, because he is writing at a time when Christianity had replaced paganism in England but had not erased the pagan past from popular memory. (5)

トールキンはアルクインに対して、中道 (via media) は『ベオウルフ』を書いた詩人の道であると結論付けた。中道 (via media) とは、「すべての過去を忘却の彼方 (あるいは地獄) へ葬り去るのではなく、さらに高まった洞察力と深い見識で、過去について熟考する」道だとトールキンは語る。ニューマンも同様に、初代教会や歴史に強い興味と関心を持っていた。

Though Tolkien was Roman Catholic and a medievalist, his religious instruction was largely through the Oratorian Fathers (of St. Philip Neri, known for his humor and simple piety) and the founder of the Oratory in England was John Henry Newman, an expert on and profoundly influenced by the Ante-Nicene Fathers. (614)

Jared Lobdell が上述するように、トールキンはローマ・カトリックの信者であるが、むしろオラトリオ会に影響を受けている。Ante-Nicene Fathers は、ニカイア公会議以前の神学者たちが残した書物を指す。2世紀から4世紀の邪教や異端をも含めた初期キリスト教の神学者たちにニューマンは造詣が深かった。1845年にニューマンが *An Essay on Development of Christian Doctrine* を書いたのは、アングリカンからローマ・カトリックへの改宗を考えあぐねていた時だった。最終的にローマ教会の方が初代教会により近いと

いう結論に至り、彼が育った教会を去ることになるが、その過程でニューマンは「歴史的事例に答えを求めた」(Chadwick 81)。トールキンが中道 (via media) を用いて古英語を読む際の過去の学ぶ姿勢は、ニューマンに重なる。

3. トールキンによる *Beowulf* 理解

トールキンは古英語を専門としており、オックスフォードでは『ベオウルフ』についての講義を長年にわたって行った。トールキンの講義ノートには、キリストを知らない人々に対する理解と思いやりが散見される。ニューマンも先述したように、邪教や異端をも大きく含めた教会史への理解が深かった。ニューマンに関して言えば、ニューマンが *On Consulting the Faithful in Matters of Doctrine* を 1859 年に執筆した際、ローマ・カトリック教会の司祭は彼を異端だと非難し、ローマの枢機卿たちはショックを受けた (Chadwick 75)。異端と言われるほど、ニューマンは教義の境界線を気にしてはいなかった。

J. R. R. Tolkien Beowulf の中でトールキンは「*Beowulf* は宣教のための寓話ではないが」(171)、「アルクインに劣らぬキリスト教徒」(329) である「*Beowulf* の作者はキリスト教が確立されて、おそらくまだ数世代しか経っていない社会に向けて書いている」(272) と解説する。ベオウルフは人間だが、人らしからぬ力を持ち、王の従兄弟という正しい血統をも持つ。ベオウルフはフロースガール王と彼の民に苦しみをもたらした怪物、グレンデルを打ち負かす。トールキンは「過去の異教徒としての高潔さや英雄的行為をどう考えればいいのか」(160) と研究テーマを掲げ、それに対して以下のように答える。

I [Tolkien] think that he [the poet] attempted to equate the noble figures of his own northern antiquity with the noble figures, sagas, judges, and kings of Israel – before Christ. They too were ‘damned’ owing to the Fall, even if they were members of the chosen people.

The redemption of Christ might work backwards. But in the Harrowing of Hell why should not (say) Hrothgar be among the rescued too? For the people of Israel could also fall away in time of trial to the worship of idols and false gods. (160-1)

トールキンはキリストの贖いがキリスト誕生以前の人々にまで及ぶ可能性について言及している。シッピーもトールキンが考える神は異教徒や先史時代の人々を忘れてはいないと述べる (229-30)。トールキンは神のお膝元イスラエル人ですら偶像崇拜など墮落したかもしれないと、先史時代の人々を裁くどころか謙虚な態度をとる。『ベオウルフ』の詩人がキリスト誕生以前の人々についてどのように考えていたかを確認するために、『ベオウルフ』170-88のトールキンによる翻訳を参照する。

That was great torment to the lord of the Scyldingas, an anguish of heart. Many a man of might sat often communing, counsel they took what it were best for stouthearted men to do against these dire terrors. At times they vowed sacrifices to idols [in their heathen fanes>] in pagan tabernacles, with prayers implored the Slayer of Souls to furnish help to them against the people's sufferings. Such was their wont, the hope of heathen men: of hell they were mindful in their hearts' thought; the Author they [knew>] comprehended not, the Judge of Deeds, nor had they heard of the Lord God, nor verily had they learned to praise the Guardian of the Heavens, the King of Glory. Woe to him that through [fiendish malice>] (probably) the malice of fiends / shall thrust down his soul into the fire's embrace, to look for no comfort nor any changel! Joy to him that is permitted after his death-day to [go seek>] find the Lord, and in the father's bosom to seek for peace! (173)

主なる神を知らない異教徒の心は地獄に囚われているが、死後、主を見出し父なる神の懐に安らぎを求めることが許される者に喜びあれと、詩人は異教徒の死後に希望を付加する。

また、トールキンは以下のように「詩人が異教徒の過去について詩を書いたという事実は、それだけで彼が（北方もしくは古典の）英雄たちを地獄行きにした当事者ではないことを概ね示す」と語る。

the mere fact that the poet wrote a poem about the pagan past shows in general that he did not belong to the party that consigned the heroes (northern or classical) to perdition. Pagan past – certainly. The poet was well aware of it. He knew that Denmark and Sweden were still in his own day heathen. Therefore his picture of Hrothgar and Beowulf is deliberate. (171)

前述のアルクインに対し、トールキンは「アルクインは地獄でおのれの罪を嘆いている異教徒の王たちにまだ関心を持っているのではないかと非難している」（329）と解説している。アルクインは神聖ローマ帝国のカール大帝に仕えていたので、当時多大な影響力を持っていたことは想像に難くない。700、800年代は、キリストを知らない時代の異教徒に関心を持つだけでも責められる時代だったことが分かる。シッピーは『ベオウルフ』詩人のジレンマは、またトールキンのジレンマでもあると語る（225）。Holly Ordwayは、教皇ピウス10世に言及している。トールキンは「教会の外に救いはない」と宣言する教会の一員ではあったが、1908年のカテキズムで、教皇ピウス10世は、教会の外にいることに帰責事由がない場合、真実を追い求め神の御心をできる限り行うならば、最終的には救いの道に至ると説く。

He [Tolkien] was a member of a Church that had declared “extra ecclesiam nulla salus”—there is no salvation outside the Church—but, as Pope Pius X in his 1908 Catechism had taught, if a person “is

outside the Church through no fault of his” and if that person “sincerely seeks the truth and does God’s will as best he can,” then “such a man is indeed separated from the body of the Church, but is united to the soul of the Church and consequently is on the way of salvation.” (380)

トールキンは教皇ピウス 10 世の考えに賛同していたのだろう。トールキンは第二バチカン公会議には失望を隠さないが、1963 年、次男マイケルに宛てた手紙に「ピウス 10 世が行なった改革は素晴らしい」と付け加えている (*Letters* 339)。過去の異教徒としての高潔さや英雄的行為が全て邪悪で呪われたものにすぎなかったと言う考えをトールキンは一蹴する。

4. 道徳的努力 - 人の世で最善を尽くす

そもそも中道 (via media) とは、ニューマンが用いたローマカトリックとプロテスタントの「両極端からの逃避」(友岡 404) を表す概念である。ニューマンがアングリカンだった時代に、ローマ・カトリック教会に反対するのではなく、より大きな視野の元で体系的神学を始めることを企てた。ニューマンがカトリックになって、この考えは放棄されたが、反対するのではなく、より大きな視野で考える姿勢が遺産として残された可能性がある。ニューマンはもともとピューリタンとして育った。オクスフォード大学のトリニティ・カレッジで学部を終えた後、オリエル・カレッジのフェロウに選ばれ、そこで間もなく子ども時代からのピューリタニズムから離れる。Owen Chadwick は「離れたと言うよりもむしろ精神的に成長して、ピューリタニズムを持ちながらも新しい観点でそれを理解し、今やキリスト教の伝統のなかのより広い遺産の一部として見るようになった」(33-4) と述べる。ニューマンは、より高い視座に立つ努力をし、ニューマンの死後、ニューマンの息吹があちらこちらに残るオラトリオ会で育ったトールキンにもその考え方は踏襲されている。

『ベオウルフ』の作者は、「神の業は、人間と (神が前もって与えた) 彼

らの力を通じて発揮されるという考えを強調している」(*J. R. R. Tolkien Beowulf* 308) とトールキンは解説する。ニューマンも、「この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、私たちはすべての人の中でもっとも惨めな者です」(第一コリント 15:19) を引用し、この地での人間側の努力を促す (Barmann 51)。ニューマンは「真理への道は道徳的である」(Chadwick 55) と考えていた。「内的に見るならば良心を見出す。道徳的法に従うようにと良心が命じる」(Chadwick 51) と語るニューマンの教えは、小さなホビットの諦めない最善の努力に現れている。

指輪保持者であるホビットのフロドは、指輪破壊の長い旅の果てにある滅びの山にとうとう辿り着くが、圧倒的な敵の大軍を目の当たりにして以下のように言う。

‘Still we shall have to try,’ said Frodo. ‘It’s no worse than I expected. I never hoped to get across. I can’t see any hope of it now. But I’ve still got to do the best I can. (924)

絶望的な状況で、さらに絶望的な光景を見てもフロドは前に進む。それも惰性で進むことなく、ベストを尽くすことを己に課す。同じくホビットのピピンもまた、殺されるに違いないと考えて、ベストを尽くすと言う。

We might die together, Merry and I, and since die we must, why not? Well, as he is not here, I hope he’ll find an easier end. But now I must do my best. (892)

ホビットのサムもまた同様である。全てをやり遂げ、一切切切が終わった時、フロドと共に死を覚悟する。そこで死を覚悟した直後に、最後の移動を行う。サム自身、この期に及んでなぜこういった行動を取るのか理解していない。ただ、自分の心が命じるままに動く。

And the journey's finished. But after coming all that way I don't want to give up yet. It's not like me, somehow, if you understand.' ... 'Well, Master, we could at least go further from this dangerous place here, from this Crack of Doom, if that's its name. Now couldn't we? Come, Mr. Frodo, let's go down the path at any rate!' (950)

この意識を失う直前の努力により、サムとフロドは一命を取り留めることになる。二人が最後の力を振り絞った移動の後、彼らがいた場所は山から噴き出す溶岩によって流されていったからである。トールキンはこの世での最後の瞬間までベストを尽くすことを一番小さな人たちに実行させる。これは「神の栄冠を得るために目標を目指して一心に走っている」(ピリピ3:14)と書かれた聖書箇所よりもさらなる上を要求する道徳感を現している。『指輪物語』で忍耐と努力するホビットたちは、まさにニューマンが言うところの信仰の冒険者である。ホビットたちが「ベストを尽くさなくてはならない」と繰り返すのは、「最後まで忍耐強く努力する人は永遠の勝利と報酬を得るのです」(Barmann 50)と語るニューマンの教えを具現化している。

5. おわりに

トールキンは古英語の研究の中で、中道 (via media) とする語を用いた。これはキリスト教が布教される前の時代、異教の人々に対する共感の方策として語られた。中道 (via media) は、オラトリオ会をイギリスに設立したニューマンがアングリカンやカトリシズムを超越したより高い視点で考えるために使われた概念である。トールキンが『ベオウルフ』の講義の中で、中道 (via media) が表象する極端を避ける態度や発言にニューマンの受容を見る。トールキンもニューマンもカトリシズムに反して、キリストを知らない異教の人々に対する理解を示す。ニューマンは神に頼るだけでなく自分の力を最大限尽くすようにと、道徳的に従うことを説いた。『ベオウルフ』の詩人とトールキンは、どちらも登場キャラクターたちに生きている間、こ

の地での働きに最善を尽くさせる。キャラクターたちが自らの内から湧き上がる良心を持ち成長し続けるのは、カトリシズムに留まらないトルキンの道徳的人生観が、自己の内面の声を聞き続け、常に最善を尽くすことを自らに課したニューマンの教えを反映している。

引用文献

- Birzer, Bradley J.. “Roman Catholicism.” *J. R. R. Tolkien Encyclopedia*, edited by Michael D. C. Drout, Routledge, Fleming, 2006, pp. 85-88.
- Chadwick, Owen. *Newman*. Oxford University Press, 1983.; チャドウィック, O.『ニューマン』川中なほ子訳, 教文社, 1995.
- Duriez, Colin. “Mabel Tolkien.” *J. R. R. Tolkien Encyclopedia*, edited by Michael D. C. Drout, Routledge, Fleming, 2006, p. 667.
- Happer, Amelia. “King Edward’s School.” *J. R. R. Tolkien Encyclopedia*, edited by Michael D. C. Drout, Routledge, Fleming, 2006, pp. 141-143.
- Lobdell, Jared. “Sin” *J. R. R. Tolkien Encyclopedia*, edited by Michael D. C. Drout, Routledge, Fleming, 2006, pp. 613-614.
- Newman, John Henry. *An Essay on Development of Christian Doctrine*. University of Notre Dame Press, 1994.
- . *Newman at St. Mary’s; a Selection of the Parochial and Plain Sermons*, edited by Lawrence F. Barmann, S.J., The Newman Press Westminster, 1962.; バーマン, L. F.『ニューマンの思想と活動』阿久根政子訳, 中央出版社, 1994.
- . *On Consulting the Faithful in Matters of Doctrine*. Sheed & Ward, 1961.
- Ordway, Holly. *Tolkien’s Faith: A Spiritual Biography*. Word on Fire Academic, 2023.
- Pearce, Joseph. *Tolkien Man and Myth*. HarperCollinsPublishers, 1998.
- Shippey, Tom. *The Road to Middle-earth: How J. R. R. Tolkien Created a New Mythology*. HarperCollinsPublishers, 2012.
- Simth, William. “Alcuin.” *J. R. R. Tolkien Encyclopedia*, edited by Michael D. C. Drout, Routledge, Fleming, 2006, pp. 4-5.
- Tolkien, J. R. R. *J. R. R. Tolkien BEOWULF*, edited by Christopher Tolkien, HarperCollinsPublishers, 2014.
- . *The Letters of J. R. R. Tolkien*, edited by Humphrey Carpenter and Christopher Tolkien, HarperCollinsPublishers, 1981.
- . *The Lord of the Rings*. HarperCollinsPublishers, 2005.
- 友岡敏明. 「ニューマンの政治思想(3) — 伝記的検討を基軸にして—」. 『南山法学』, 41巻3・4号, 2018, pp. 389-419.